

「お灸はジャーニー」 心と体を癒しに導く旅

ムクンド・スプラマニアンさん
Mukund Subramanian Ph.D.



(photo: Kazumi Atsuta)

心と体の癒し
OKYU

ムクンドさんのお灸は日本の
もぐさを使用している (photo: Kazumi Atsuta)



青森県で大蒜(ニンニク)とお灸と触手を交えた独特の療法を習得した、ムクンド・スプラマニアンさん。現在、サンフランシスコのミッション地区で治療を通して人々に心と体の癒しを与えている。

ムクンドさんは、南インドのチェンナイ(旧マドラス)出身。12歳の時、父親の仕事の関係で日本へ。流暢な日本語を話すムクンドさんは「高校まで日本に住んでいて、インターナショナルスクールに通っていた頃から日本語を習い始めました」と話す。

家族は日本に住み続け、その後、ムクンドさんは渡米。オレゴン州のリード大学在学中に自己を深めるため、また代々受け継がれた古典音楽を習うために、何度かインドへ帰る。

「その時は、トヨさんがお灸の先生だとは知らなかった。僕は祭りが面白くて3年続けて恐山に出掛けました。3年経ってから、トヨさんが地元で有名なお灸の先生であることがわかったのです」

その後、ムクンドさんは再渡米、スタンフォード大学院に進み、文化人類学を学ぶ。

「文化人類学の研究の一環でトヨさんが住む青森県の柿崎を訪ねているうち、青森の文化や大蒜お灸に興味を惹かれ、深く追求していききました」

必然ともいえるトヨさんとの出逢いから数年の後、ムクンドさんは柿崎に住み、トヨさんの持つマインドボディワークともいえるすべの習得に励む。その後、文化人類学の研究も続けた。

進む道の主軸は「お灸」

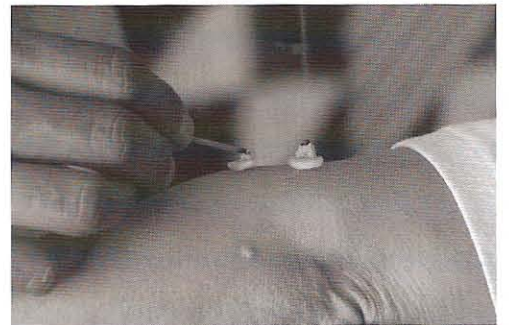
ある時、これから自分が進んでいく道の主軸になるのが「大蒜お灸だ」と確信する出来事があったという。

「卒論などもあつて日本を離れていたのですが、2004年に再びトヨさんのもとを訪れた際に、トヨさんの療法をさせてもらったのです。その時トヨさんが『手のいくところが的確。これを職にしたらいい』と言ってくれたのです」

ひとつの確信を得たムクンドさんは、2005年から大蒜お灸と触手を交えた独特の療法をスタートさせる。「教えてもらって、勉強して、経験を積んで。これからそれは変わらないけれど、お灸が僕の道だと思っと思っています」と笑顔で話す。

原因を見つけ 根本から治す

ムクンドさんが施す大蒜お灸+触手の療治は、デトックス(解毒)、胃腸障害、腰痛、肩こり、ストレス、腱鞘炎、皮膚病、アレルギー、婦人病、免疫力の強化、健康増進、慢性疲労、神経痛など効果をもたらすものは多岐にわたるといいます。



大蒜のスライスの上にもぐさをのせる
(photo: Kazumi Atsuta)

「人によつて療治の回数などは違いますが、デトックスは一度試されたらいい。体も心も軽くなると思います。また、腎臓が悪いために花粉症のようなアレルギーを起こしている場合もあります。健康だと思っけてもバランスの崩れや、無意識に抱えたストレスが体に潜んでいる可能性があり、それがいろいろなかたちであらわれるのです。心と体はつながっていますよ」といい、「痛みや不快感となつてあらわれる部分だけでなく、原因の根本となる部分を見つけ出し、そこから療治していくのが基本。僕は『お灸はジャーニーのようなもの』と思っけています。僕がツボを刺激したり、痛いところ

ろに手を触れて原因を探し、その部分にお灸をします。そのお灸の熱が体の中に深く入り込んで、痛みを和らげ、心と体の癒しのジャーニーが進んでいきます」と言葉が続ける。

体調不良や慢性の痛みなど健康の不安を抱えている人は、「お灸ジャーニー」を試してみてもいいかがだろうか。

今後は文化人類学の研究の成果とお灸をあわせた本の出版や、アーユルベータ(日本の鍼灸とある伝統医学同様、インドの伝統医学の名前。サンスクリット語で「生命(アーユル)」「科学・智慧(ベータ)」という意味を持つている)とお灸のコラボレーションも思考中だという。



ムクンド・スプラマニアンさん

詳細問い合わせ
TEL(415)821-4217
ウェブサイト moghusa.com

大蒜お灸の前に触手やツボ刺激で原因の根本となるところを探る

(photo: Kazumi Atsuta)

